

中古日本語における アスペクトとテンスの相関

— 主節とノチ節の考察から —

黒木 邦彦

1 はじめに

1.1 アスペクトとテンスの相関

アスペクトとテンスは、それぞれ次のように定義される文法的範疇である。

アスペクト：事態の全体に注目するか、あるいは、特定の局面に注目するかといった、事態のとらえ方を表す文法的範疇。

テンス：過去、現在、未来のような、発話時を基準とした、事態の時間的な位置づけを表す文法的範疇。

両者は方法こそ違うものの、言語の時間表現に関わるという点で共通している。そのため、言語によっては、この二つの範疇に相関が認められる。たとえば、Comrie(1976)によれば、文章アラビア語やアフリカ西部のヨルバ語・イグボ語では、不完成性と現在性、完成性と過去性が相関しているという (Dahl 1985: 81-84, Bybee 1994, Bybee et al. 1994: 83-84, 151ff, Dahl & Velupillai 2005 なども参照)。

In written Arabic, [. . .] We may start with the function of the Perfective and Imperfective where the rest of the sentence contains no overt specification of time reference (e.g. no temporal adverbs). Here the Perfective is interpreted with perfective and past meaning, while the Imperfective is interpreted with imperfective and present meaning:

Jalasū (Pfv.)	ʃalā	'l- bābi.		
They-sat-down	at	the door.		
ʔallāhu	yaʃlamu (Ipfv.)	bi-	mā	taʃmalūna (Ipfv.).
God	he-know	about	what	you-do.

God knows what you are doing.

(Comrie 1976: 78)

[黒木訳：文章アラビア語では、時間副詞などによる時間的な指示がない場合、完成相は完成と過去を、不完成相は不完成と現在を表すものとして解釈される]

In a number of West African languages, including Yoruba and Igbo, there are no specific markers of past versus present tense, although there are markers of aspect. [. . .] In fact, in the absence of any contextual indication of time reference (e.g. a temporal adverbial), the Imperfective forms (simple stative verb or *ní/nà* form [黒

木注: 「ń」はヨルバ語の, 「nà」はイグボ語の不完成相の形式] of nonstative verb) are interpreted as referring to the present, while the Perfective forms (simple nonstative verb) are interpreted as referring to the past, for instance: Yoruba ó ń owó, Igbo ó còrò é'gò [黒木注: 例文中の下線は, 原文ではいずれも下点。以下同じ] 'he wants money'; Yoruba ó ń sísé, Igbo ó nà àrú ó' rú 'he is working, he works (habitually)'; Yoruba ó wá, Igbo ó byàrà 'he came'. (同上: 82-83)

[黒木訳: テンスを持たないヨルバ語・イグボ語では, 時間副詞などによる時間的な指示がない場合, 完成相は過去を, 不完成相は現在を表すものとして解釈される]

たとえば, 現代日本語(標準語を指す。以下“現代語”)では, 「-ている」の有無が[継続相: 完成相]というアスペクトの対立を, 「-た」の有無が[過去: 非過去]というテンスの対立をなしているが(奥田 1977, 鈴木重 1979, 高橋 1985, 工藤 1995 参照), この二つの範疇は独立的であり, 継続相と非過去テンス, 完成相と過去テンスが強い相関を示すということはない。

ただし, 現代語がそうであるからといって, 日本語にはアスペクトとテンスの相関が認められないとするのは早計である。というのも, 中古日本語(本稿では, 10世紀~12世紀前半の日本語を指す。以下“中古語”)¹においては, Comrie が指摘するようなアスペクトとテンスの相関が見られるからである。

次節では, 中古語のアスペクトとテンスを概観し, 両者がどのように相関しているのかを見る。

1.2 中古語のアスペクト・テンス

1.2.1 「-つ」「-ぬ」の有無と完成性

一般に, 中古語においては, いわゆる“完了の助動詞”「-つ」「-ぬ」「-たり」「-り」がアスペクトに属するとされる。このうち, 「-つ」「-ぬ」は完成性を与える形式と考えられる。

- (1) a. 博打, 京童, 数知らず集まりて, [偽者のあて宮が乗っている] 一の車を奪ひ取る。殿の人々空騒ぎすれば, 車の簾掲げてのたまふ。^[上野宮] 奪ひ得つ, これやこの, 惜しみたまふ御女。[...]と言ひて[...]

(うつほ, 藤原の君, [1] 161)

- b. [夜更けを報告し, 就寝を促す場面]

夜いたう更けぬ。おほし寝たまひぬ。^(落窪, 卷1, 155)

- (2) a. [先刻の出来事について語る場面]

^[正頼]「なほ遊ばせ。祿にらうたしと思ふ娘奉らむ」と言ひたれば, [仲忠は]下り走り, 舞踏して, 二なき声調べて, いとあまたの手弾きつる。全

て言ふよしなく、父大臣、涙落としたまひつ。(うつほ、俊蔭,[1] 123)

b. [自身の来歴について語る場面]

年いときなきほどに父母を離れて、唐土へ渡されぬ。あたの風、大いな
る波に漂はされて、知らぬ国に打ち寄せらる。(うつほ、俊蔭,[1] 43)

(1)の「奪ひ得つ、更けぬ」は、波線部から((1b)はさらに、程度を表す「いたう」という成分からも)、限界づけられていること(開始/終了限界を達成していること)がわかる。(2)の「弾きつ、渡されぬ」は波線部と継起的関係にあり、時間的に先行することから、事態全体が一括されているとわかる。本稿では、(1)のような限界づけと(2)のような全体の一括をまとめて、“完成”とする。

有標のアスペクト形式をとらないもの(以下、形態論的に無標のものを“ゼロ”と呼ぶ)は、完成以外の意味を表すことができる。

(3) a. [現在とりかかっている動作について説明する場面]

〔姫君〕「儼やらふとて、犬君がこれ [= 遊び道具] をこぼちはべりにければ、つくろひはべるぞ」とて、いと大事と思いたり。〔源氏〕「げに、いと心なき人のしわざにもはべるなるかな。今つくろはせはべらむ。今日は言忌みして、な泣いたまひそ」とて[...] (源氏、紅葉賀,[1] 321)
儼: 鬼やらい。疫鬼を追いやる行事。

b. [あて宮の部屋をのぞき見たときの状況について語る場面]

かの殿に侍りしとき、兵衛の君に御声をだに聞かせよと責めしかば、中の御殿の東の簾と格子との狭間になむ入りたりし。格子の穴開けて見しかば、[あて宮は]母屋の御簾を上げて、灯、御前に灯して、この大将の得たまへる皇女と、碁なむ打ちたまひし。さては琴弾きなどなむ。それを見しままにふたがりにし胸なむ、まださながら。(うつほ、手習,[3] 65)

(4) a. さはありとも、慎みたまふなむよきことなれば、いとよく祈願し申しはべらむ。ただ今も熊野に罷り移るなり。去年の八月より、所々に読経奉るなり。(うつほ、春日詣,[1] 275)

b. [亡き母から、早口を度々注意されていたと話す場面]

舌の本性にこそはべらめ。幼くはべりしときだに、故母の當に苦しがり教へはべりし。(源氏、春夏,[3] 244)

(3)の「つくろふ、(碁を)打ちき」は、波線部から、開始限界を達成し、なお継続中であること(以下“進行”)が、(4)の「読経奉る、教へき」は、波線部から、習慣的に繰り返されていること(以下“習慣”)がわかる(なお、(3)(4)における(a)と(b)は、

いわゆる“過去の助動詞”「-き」の有無で異なる)。本稿では、(3)のような進行と(4)のような習慣をまとめて、“不完全”とする。

ただし、「ゼロ」の場合、必ずしも不完全を表すわけではない。「-つ,-ぬ」を用いずとも、(1)(2)のように完成を表すことは可能である。

(5) a. 源氏の中將の、わらは病みまじなひにもものしたまひけるを、ただ今なむ聞きつけはべる。いみじう忍びたまひければ知りはべらで、ここに侍りながら御とぶらひにも参でざりける。(源氏,若紫,[1] 209)

b. 上には、「[...][千蔭は]何を飽かずとてか、朝廷にも悪しき心を思ふべき。[私は]多くのついでを越してこそ,[千蔭を]大臣の位にはなしつれ。しか思ふものならば、伊豆の島にこそ遣はすべかなれ」とこそ仰せられしか。人間かず、佑宗一人なむ承りし。(うつほ,忠こそ,[1] 232)

(5a)は時間副詞「ただ今」があるので、「聞きつく」は限界づけられている。(5b)の「仰せられき」は、発話の内容を示す引用節「〜と」から、事態全体が一括されているとわかる。

1.2.2 「-き」の有無と完成性

このように、「-つ」「-ぬ」によらずとも完成を表すことはできるのであるが、その場合、「-き」の有無が影響しているように思われる(以下、特定の範疇に限定せず、複合的に述語の形を問題とするときは、“〜キ”のように表記。形態論的に無標のものは“基本形”と呼ぶ)。いくつかの先行研究において、基本形を不完全相(ないし継続相)、〜キを完成相とする説が唱えられているが²、実際に基本形の用法と〜キの用法を比較してみると、前者には(3a)(4a)のような不完全的なものが、後者には(5b)のような完結的なものが多く見られる(詳しくは2節で述べる)。

1.3 本稿の目的

本稿では、中古語のアスペクト・テンスについて考察し、両者の間に相関が認められることを明らかにする。なお、厳密に言えば、アスペクトは動態動詞にのみ存在するカテゴリーなので³、本稿のデータは動態動詞の例に限定する(これ以外にも適宜制限を設ける。2.2節,3.4節参照)。また、動態動詞の本分が“修飾”(modification; 連用修飾と連体修飾の両方を含む)よりも“陳述”(predication)にあることを踏まえると(八亀2001: 4-7; 2004参照⁴)、統語論的な環境の違い、すなわち、陳述が本務の(終止法の述語をとる)主節と修飾が本務の(非終止法の述語をとる)従

属節の違いには、十分留意しなければならない。そこで、まずは、動態動詞にとってより中心的な主節から入り(2節)、続いて従属節に移る(3節)。

2 主節におけるアスペクトとテンスの相関

本節では、主節のアスペクト・テンスについて考察し、両者の相関を明らかにする。はじめに、資料とデータについて述べる(2.1-2.2節)。次にデータの量的分布(述語の形とそのアスペクト的な意味の二点が分類基準)を示し(2.3節)、具体例をもとに、現在テンスと過去テンスのアスペクト的な含意を明らかにする(2.4節)。最後にまとめをおこなう(2.5節)。

2.1 資料

資料は、10世紀後半～11世紀初頭の成立とされる、『落窪物語』(全巻)『うつほ物語』(「あて宮」まで)『源氏物語』(「若菜上」まで)の会話文である⁵。言語研究における一次的資料は話しことばであるが、中古語は書きことばしか残っていないので、会話文(独話文と心内話文も含む)で代用することになる。もちろん、これも書きことばには違いないが、“今、ここ、私”の基準(deictic center)が特定できるという点で、話しことばに通じる。

2.2 データ

Dahl(1985)や工藤(1995)などによれば、アスペクト・テンスの研究においては、i)受動よりも能動、ii)否定よりも肯定がより中心的なデータとして扱われるという。それぞれの理由は次のとおりである。

i)能動と受動にアスペクト上の違いが認められるなら、形態論的に無標の前者から取りかかるのが無難である。能動/受動によってアスペクトが異なるというのはよくあることで、たとえば、工藤(1995)には次のような指摘がある。

ヴォイスとアスペクトの関わりについては、歴史言語学的にも記述言語学的にも、まず、受動態と結果性との関係が問題とされてきた。現代日本語もその例外ではなく、次のような例をみれば、能動—受動の対立が、〈動作継続〉か〈結果継続〉かのアスペクト的意味の対立であることが分かる。

- | | | |
|-------------------|----|----------------|
| ・太郎がロープを切っている。 | —— | ロープが切られている。 |
| ・花子が太郎の顔に墨を塗っている。 | —— | 太郎の顔に墨が塗られている。 |
| | | 太郎は顔に墨を塗られている。 |

[...]以上の例に見られるように、能動—受動の対立のある他動詞においては、自動詞の

場合のように、直接的に語彙的意味とアスペクト的意味がむすびつくのではなく、ヴォイス構造が媒介していることになる。(工藤 1995: 50)

同様の現象が中古語にあるかは未確認であるが、意志性に欠ける受動においては、「ぬ」をとることが多くなるのは確かである(対照的に、「つ」をとることはない。小林 1941, 大野 1968 参照)。

ii) 肯定におけるアスペクト・テンスと否定におけるそれは、往々にして鏡像関係にないものである。その場合、形態論的に無標の前者から研究を進めるのが常套的である。寺村(1971)や工藤(1996)が指摘するように、現代語のアスペクト・テンスは肯否(極性)によって異なるが、中古語においても同様のことが言える。これは、次の二点によって確認できる。

(6) a. ~ツ, ~ヌには対応する否定形がない(*~テズ, *~ナズ)⁶。

b. ~タリ, ~リには~タラズ, ~ラズという否定形があるが、実際には~ズ(基本形の否定形に相当)の方がよく対応している。

以上の理由から、主節のデータは、能動、肯定という条件を満たす例に限る。

2.3 量的分布

量的分布を明らかにするため、述語の形とアスペクト的な意味(完成的か不完成的か。(1)(2)(5)のような例が前者に、(3)(4)のような例が後者にあたる。なお、どちらにも該当しないものは対象外)の二点について分析をおこなった。結果は次のとおりである。

表 1: 述語の形とアスペクト的な意味

現在テンス				過去テンス			
形 \ 意味	完成的	不完成的	合計	形 \ 意味	完成的	不完成的	合計
基本形	71	101	172	~キ	87	4	91
~ツ	105	3	108	~テキ	8	0	8
~ヌ	107	0	107	~ニキ	48	0	48
合計	283	104	387	合計	143	4	147

2.4 現在テンスと過去テンスのアスペクト的な含意

表 1 の量的分布を見ると、「ゼロ」(アスペクト)のアスペクト的な意味は、テンスによって変わることがわかる。具体的には次のようである。

(7) a. 「ゼロ」における [完成的: 不完成的] の比率は、現在テンス(基本形)においては約 2:3 であるが、過去テンス(~キ)においては約 22:1 である。

b. 完成的な [ゼロ: -つ, -ぬ] の比率は、現在テンス(基本形: ~ツ, ~ヌ)

においては約 1:3 であるが、過去テンス(～キ:～テキ,～ニキ)においては約 3:2 である。

これによれば、「ゼロ」のAspect的な意味は、現在テンスにおいては中立的(動詞の語彙的な意味による。注7参照)、過去テンスにおいては完成的となる。ただし、これが形態論的に無標であることを考慮すると、現在テンスと過去テンスでは、Aspect的な含意が異なるとする方が適当である。現在テンスは中立的なため、完成性を明示する場合、基本的に「-つ」「-ぬ」をとるが、過去テンスはそのままで完成性を含意するので、「-つ」「-ぬ」がさほど必要とされないのである。

2.5 まとめ

本節では、「ゼロ」のAspect的な意味の分析と、完成的な[ゼロ:-つ,-ぬ]の比率の調査をおこなった。その結果、主節においては、現在テンスが中立性を、過去テンスが完成性を含意することが明らかになった。

鈴木泰(2004; 2005)によれば、Aspectに関して、形態論的に無標という点で共通する基本形と～キは、ともに不完成相とされる。しかし、表1が示すように、～キの用法は完成的なものが圧倒的に多く、不完成相とする説を積極的に支持する理由/根拠はない。よって、基本形と～キは形態論的には共通するものの、意味論的には齟齬をきたしていると考えるのが妥当である(黒木2006参照⁷⁾。

3 ノチ節におけるAspectとテンスの相関

Aspect・テンスのふるまいは、統語論的な環境の違いによって異なるとされる。たとえば、現代語における[ゼロ:-た]の対立は、主節では[非過去:過去]であるが、従属節では[相対的非過去:相対的過去]や[不完成:完成]となる。

- (8) a. 明日梅田に行く。 <非過去>
b. 昨日梅田に行った。 <過去>
- (9) a. 来年留学する人たちが、研究室に集まった。 <相対的非過去>
b. 去年留学した人たちが、研究室に集まった。 <相対的過去>
- (10) a. 昨日、梅田のヨドバシカメラに行くとき、阪急電車の中で高校時代の友達に会った。 <不完成>
b. 昨日、梅田のヨドバシカメラに行ったとき、店内で高校時代の友達に会った。 <完成>

ただし、意味論的な共通性は十分認められる。(8)と(9)は、発話時と参照節時(時

間的な面で従属節に参照される節が指す時間。(9)でいえば、「研究室に集まった」という節が指す時間。詳しくは3.2節で述べる)のどちらを基準とするかでのみ異なり、共通性を見てとるのは容易である。(8)と(10)にしても、発話時/参照節時((10)でいえば、「～高校時代の友達に会った」という節が指す時間)を基準に、「ゼロ」は終了限界の未達成を、「-た」は終了限界の達成を表すとすれば、一括にとらえることができる。

このようであるから、前節で指摘したアスペクトとテンスの相関は、主節以外、すなわち、従属節においても確認されることが期待される。ただし、一口に従属節といっても、名詞節、副詞節、条件節といった類型によって性格が異なるので、本稿では、ノチ節(形式名詞「のち」が承ける従属節)一つに絞って考察をおこなう。これを選ぶ理由は、中古語の従属節の中でも、時間的な面からの研究が比較的進んでいるためである。

具体的な考察に入る前に、3.1-3.2節で、先行研究の概観と問題点の指摘をおこなうこととする。

3.1 先行研究概観

現代語のアト節(形式名詞「あと」が承ける従属節)と中古語のノチ節は、ともにアト/ノチ節時以後を指すという点で共通する⁸。しかし、出現可能なアスペクト・テンス形式の種類には、大きな違いがある。

- (1) a. 造反議員を復党させたあとの支持率は、今より下回るだろう。
b. 長男の家に女の子が生まれたあと、次男の家に男の子が生まれた。
- (2) a. 着るべきもの、常よりも心とどめたる色合ひ、仕様、いとあらまほしくて、[女は]さすがに我が見捨ててむのちをさへなむ、思ひやり後見たりし。
(源氏、帚木、[1] 75)
b. [源氏が]仰せられしのちなん、隣のこと知りてはべる者呼びて問はせはべりしかど、はかばかしくも申しはべらず[...] (源氏、夕顔、[1] 143)

前者は原則「-た」一つに限定されるが、後者はそうした制約を受けない。橋本修(1994)や井島(1996)によれば、ノチ節に現れるアスペクト・テンス形式には、次のようなものがあるという(テンス形式をもとに整理⁹)。

「ゼロ」の系列: 「ゼロ」「-つ」「-ぬ」「-たり」

「-む」の系列: 「-む」「-なむ」「-てむ」

「-き」の系列: 「-き」「-てき」「-にき」「-たりき」「-りき」

「-けり」の系列:「-けり」「-にけり」「-てけり」

このように、中古語のノチ節には様々な形式が現れるのであるが、橋本修は、次のような規則があることを指摘している(なお、橋本修のデータには上代語も含まれるが、中古語との間に顕著な違いはないようである)。

(13) ノチ節が非状態述語[黒木注:動態動詞]をとる場合、

a.非過去形(キ,ケリのつかない形)の場合,完了形[黒木注:有標のアスペクト形式「-つ」「-ぬ」「-たり」「-り」のいずれかをとり形]の出現が義務的である。

b.過去形(キ,ケリのついた形)の場合,完了形の出現は義務的でない。

(橋本修 1994: 56)

そして、こうした規則の存在から、ノチ節において、アスペクトとテンスは次のような関係にあると述べる。

(14) 非状態述語の非過去形は、アスペクト上は未完了[黒木注: 不完全]が無標だが、非状態述語の過去形は、アスペクト上は完了[黒木注: 完成]が無標である。
(同上: 70)

(14)は、不完全性と現在性、完成性と過去性の相関を示唆するものであるが、1.1節で確認したとおり、このような相関は、他言語にも見られるものである。したがって、(13)の現象とそれに対する(14)の説は、中古語に特化した個別言語学的な観点からだけでなく、一般言語学的な観点からも注目される。

3.2 先行研究の問題点

橋本修(1994)で報告された(13)の現象と、それに対する(14)の説はともに興味深いものであるが、橋本修自身課題としているように、参照節との関係が考慮されていない点に問題を残す。本稿で言う参照節は、主節と呼ばれることが多いようであるが、終止法の述語をとる主節とは必ずしも一致しないので、注意を要する。

(15) [[さもあらん]のちには、え褒めたてまつらざらむ]が口惜しきなり]。

(枕,135段,189)

(15)の主節は「～が口惜しきなり」であるが、ノチ節「さもあらん」の参照節にあたるのは、「～え褒めたてまつらざらむ」である。

ノチ節だけを観察する限り、(13)の規則に適う次の例に、異常な点は見当たらない(ノチ節は過去テンスであるから、アスペクトを標示せずともよい)。しかし、参照節との関係にも目を向けると、ある問題が浮かび上がってくる。

(16) a. 昔の内裏わたりにてほの見たてまつりしのち、おぼつかなしかし。

(源氏, 蜚, [3] 207)

おぼつかなしかし: おそらく, お目にかかったことはございません。

b. [母である六条御息所が物の怪となって現れたことを, 人づてに] 伝へ聞こしめしけるのち, [...] [秋好中宮は, 母が] のたまひけんありさまの, 詳しう聞かまほしきを, まほにはえうち出で聞こえたまはで [...]

(源氏, 鈴虫, [4] 388)

(16)における, ノチ節と参照節のテンス形式の組み合わせは, [-き / -けり—ゼロ] である。このときの「-き」「-けり」は, 次のどちらかの機能を担うと考えられる。

絶対的テンス: ノチ節時が発話時以前(過去)であることを表す。

相対的テンス¹⁰: ノチ節時が参照節時以前(相対的過去)であることを表す。

ただし, いずれにせよ, (16)はテンス形式の組み合わせだけで, ノチ節時が参照節時に先行すること(以下, “ノチ節時>参照節時”のように表記)がわかる。ノチ節にアスペクトの標示されない例が全て(16)のようなら, ノチ節の「-き」「-けり」に完成性を認めずともよいので¹¹, (14)の説は退けられる。ただし, 現状ではノチ節の観察しかなされていないため, (14)の妥当性は量りかねる。

そこで, 次節以降では参照節との関係を視野に入れ, ノチ節におけるアスペクトとテンスの相関について考察する。はじめに, 資料とデータについて述べる(3.3-3.4節)。続いてデータの量的分布(ノチ節と参照節のアスペクト・テンス形式が分類基準)を示し(3.5節), 具体例に基づいて, ノチ節のアスペクト・テンスについて考察する(3.6-3.7節)。最後にまとめをおこなう(3.8節)。

3.3 資料

資料は, 10世紀~12世紀前半の成立とされる下記の和文文献である。

『竹取物語』『伊勢物語』『土左日記』『平中物語』『落窪物語』『かげろふ日記』『うつほ物語』『大和物語』『枕草子』『源氏物語』『紫式部日記』『栄花物語』『和泉式部日記』『堤中納言物語』『浜松中納言物語』『夜の寝覚』『更級日記』『狭衣物語』『大鏡』『篁物語』¹²

ただし, ノチ節の使用例は絶対量が乏しいため, 地の文も資料とせざるをえない。テンスは, 会話文と地の文では基準時が異なるが(工藤 1995, 鈴木泰 1999² 参照), 本稿においてこの違いは特に問題とならないため, 両者を区別することはない。

3.4 データ

本節の考察は、参照節との関係に留意しながらおこなわれるため、データは、参照節に係る副詞節として働くものに限定する。中古語においては、時間を表す副詞節と参照節の結びつきが強く、多くの場合、両者のテンスが一致する¹³。

- (17) a. のどかにありつきなんのちにぞ、自らばかりに浅からぬ心のうち見せ知らせて、語らひよりつつ、忍びやかならん山里に隠し据ゑたらん。

(浜松、巻3, 290)

のどかにありつきなんのちにぞ：ゆっくりと落ち着いたあとに。

- b. あやしくもなりにけるかな。[以前仲頼が]もの言ひしとき、答へもせず
なりにしを[...] (うつほ、あて宮、[2] 139)

一方の名詞節であるが、「のち」のような形式名詞が承けるものには、そもそも参照節が存在しない(現代語の研究ではあるが、岩崎 1999 により、名詞節として働くマエ節・アト節は、参照節を持たないことが知られている)。よって、本節の考察において、これをデータとすることはできない。

3.5 量的分布

量的分布を明らかにするため、ノチ節と参照節のAspect・テンス形式についてデータを分析したところ、次のような結果が得られた(次ページ表2参照)。

ノチ節と参照節のテンス形式を見ると、その組み合わせが、次の三通りに限定されることに気づく。

(18)	ノチ節	参照節	
a.	「ゼロ/-む」	「ゼロ/-む」	[非過去—非過去]
b.	「-き/-けり」	「ゼロ」	[過去—現在]
c.	「-き/-けり」	「-き/-けり」	[過去—過去]

テンス形式の組み合わせに、[ゼロ/-む—-き/-けり](非過去—過去)と[-き/-けり—-む](過去—未来)は存在しない。前者はおそらく、[ノチ節時>参照節時]に反するためだろう。ノチ節が副詞節として働く場合、必然的にこの関係が導かれるのであるが、[ゼロ/-む—-き/-けり]、すなわち、[非過去—過去]という組み合わせは、明らかにこれにそぐわない。

表 2: ノチ節と参照節のアスペクト・テンス形式*

ノチ節のアスペクト・ テンス形式 参照節の テンス形式	ゼロ				-つ, -ぬ, -たり				合計
	ゼロ	-む	-き	-けり	ゼロ	-む	-き	-けり	
ゼロ	0	0	4	1	21	2	28	1	57
-む (-べし, 命令形**)	0	0	0	0	2	9***	0	0	11
-き	0	0	1	0	0	0	11	0	12
-けり	0	0	1	0	0	0	3	4	8
合計	0	0	6	1	23	11	42	5	88

*『竹取物語』『伊勢物語』『土左日記』『平中物語』『篁物語』からはデータが得られなかった。

** これらは未来テンスではないが、時間的に未来を表すためここに入れた。

*** ここにのみ、参照節に「-べし」が1例、命令形が3例現れる。

後者は、ノチ節の「-き」「-けり」が絶対的テンスであることの現れである。(16)から、ノチ節の「-き」「-けり」は、相対的テンスとして機能するとも考えられるが、もしそうであれば、[-き/-けり—む]があってもよいはずである。しかし、実際のところこの組み合わせは存在しないので、ノチ節の「-き」「-けり」が相対的テンスであるとは考えにくい¹⁴。

3.6 アスペクトが標示されるノチ節

橋本修(1994)が述べるとおり(13参照)、ノチ節が非過去テンスの場合、アスペクトは必ず標示される。なお、(18)に示したとおり、ノチ節が非過去テンスのときは、参照節も必ず非過去テンスとなる。

(19) a. ねたきもの。人のもとにこれより遣るも、人の返事も書いて遣りつるのち、文字一つ二つ思ひなほしたる。(枕, 95段, 145)

b. のどかにありつきなんのちにぞ、自らばかりに浅からぬ心のうち見せ知らせて、語らひよりつつ、忍びやかならん山里に隠し据ゑたらん。

(浜松, 巻3, 290; (17a)を再掲)

c. さるべき人々少しばかり具して参りゐたるのちに、蔵人俊経、二藍のうつくしき取りて、広げ敷くを見れば[...]伊勢海といふ催馬楽を葦手に縫ひたり。(荣花, 巻32, [2] 375)

ノチ節が過去テンスであっても、アスペクトはおおむね標示される。これも(18)に示したが、ノチ節のテンスが過去であれば、参照節のテンスは現在ないし過去となる(前節で述べたとおり、[過去—未来]はない)。

- (20) a. 姫君はこのこと 聞きたまひてしのち、おそろしくかなしく思されて、「骸をだに残さず、この世に亡くなりなばや」と 思し入るに[...]

(寝覚、巻1, 76)

- b. 院の女御も 失せたまひにしのち、殿、いとをしく 心細げにおはしければ[...]

(栄花、巻16,[2] 30)

- c. 源氏の宮は、[狭衣が]古き跡 訪ねたまへりしのちは、いみじう疎みたる御気色を、「さればよ」と 心憂きに[...]

(狭衣、巻1, 75)

古き跡訪ねたまへりしのちは: 古い恋物語に託して、源氏の宮に想いを伝えてからは。

[ノチ節時>参照節時]が成り立つとき、ノチ節の事態は、参照節の事態が生起する前に完成していなければならない。よって、ノチ節に現れる有標のアスペクト形式は、いずれも完成性を付与すると見てよい。

3.7 アスペクトが標示されないノチ節

このように、ノチ節のほとんどがアスペクトを標示するのであるが、過去テンスのときに限り、有標のアスペクト形式をとらないことがある。

- (21) a. 昔の、内裏わたりにて ほの見たてまつりしのち、おぼつかなしかし。

(源氏、蜚,[3] 207; (16a)を再掲)

- b. [母である六条御息所が物の怪となって現れたことを、人づてに] 伝へ聞こしめしけるのち、[...][秋好中宮は、母が]のたまひけんありさまの、詳しう 聞かまほしきを、まほにはえうち出で聞こえたまはで、ただ、「...」など、かすめつつぞのたまふ。(源氏、鈴虫,[4] 388; (16b)を再掲)

- (22) a. [源氏が] 仰せられしのちなん、隣のこと知りてはべる者呼びて 聞はせはべりしかど、はかばかしくも申しはべらず[...](源氏、夕顔,[1] 143)

- b. はかなかりし手すさびも、[狭衣が]見しやうに 聞こえたまひしのちは、[女二の宮は]うしろめたうて、御心のうちよりも 漏らしたまはざりけり。(狭衣、巻4, 347)

(21)は[過去—現在]という組み合わせから、[ノチ節時>参照節時]が明らかなので(3.2節で述べたように、このとき、ノチ節に現れた「-き」「-けり」の機能は、絶対的テンスでも相対的テンスでもよい)、ノチ節にアスペクトが標示されずともよい。しかし、[過去—過去]の(22)は、ノチ節と参照節の時間的關係が不明瞭であるにもかかわらず、有標のアスペクト形式をとらないのである。

表2が示すとおり、(22)のような例はここに挙げた2例のみであるが、例外とされ

るようなものではない。[非過去—非過去]の場合、(19)のように、ノチ節には必ずアスペクトが標示されるが、[過去—過去]だと、(22)のように標示されずともよい。こうした現象から、ノチ節においては、現在テンスが不完成性を、過去テンスが完成性を含意すると考えられる。

3.8 まとめ

本節ではまず、ノチ節と参照節のテンス形式に注目し、ノチ節のテンス形式が、絶対的テンスとしてのみ機能することを確かめた。そして、[非過去—非過去]と[過去—過去]におけるアスペクトの標示状況から、ノチ節においては、現在テンスが不完成的、過去テンスが完成的であることを明らかにした。

また、ノチ節のテンス形式が、常に絶対的テンスであるということによって、

- (23) [黒木注：ノチ節における]非状態述語の非過去形は、アスペクト上は未完了が無標だが、非状態述語の過去形は、アスペクト上は完了が無標である
(橋本修 1994: 70; (14)を再掲)

という橋本修の説は、誤りでないことが実証された。

4 結論：中古日本語におけるアスペクトとテンスの相関

本稿の主張をまとめると、次のようである。

主節のアスペクト・テンス：

- 「ゼロ」における[完成的：不完成的]の比率は、現在テンスにおいては約 2:3 であるが、過去テンスにおいては約 22:1 である (2.4 節)。
- 完成的な[ゼロ：-つ、-ぬ]の比率は、現在テンスにおいては約 1:3 であるが、過去テンスにおいては約 3:2 である (2.4 節)。
- 上記 a) b) から、「ゼロ」のアスペクト的な意味は、テンスによって変わることがわかる。ただし、これが形態論的に無標であることを考慮すると、現在テンスと過去テンスでは、アスペクト的な含意が異なるとする方が適当である。つまり、主節においては、現在テンスが中立性を、過去テンスが完成性を含意するのである (2.4 節, 2.5 節)。

ノチ節のアスペクト・テンス：

- (16)のように、テンス形式の組み合わせが[-き/-けり—ゼロ]であれば、これだけで[ノチ節時>参照節時]がわかる。ノチ節にアスペクトの標示されない例が全て(16)のようななら、ノチ節の「-き」「-けり」に完成性を認め

ずともよいので、(4)の説は退けられる(3.2節)。

- b) (16)から、ノチ節の「-き」「-けり」は、相対的テンスとして機能するとも考えられるが、もしそうであれば、[-き/-けり—む]があってもよいはずである。しかし、実際のところこの組み合わせは存在しないので、ノチ節の「-き」「-けり」が相対的テンスであるとは考えにくい(3.5節)。また、これによって、(14)/(23)の橋本修の説は、誤りでないことが実証された(3.8節)。
- c) [非過去—非過去]の場合、(19)のように、ノチ節には必ずアスペクトが標示されるが、[過去—過去]だと、(22)のように標示されずともよい。こうした現象から、ノチ節においては、現在テンスが不完成性を、過去テンスが完成性を含意すると考えられる(3.7節)。

過去テンスは、主節においてもノチ節においても完成性を含意する。一方、現在テンスは、主節とノチ節ではアスペクト的な含意が異なるが、必ずしも完成性を含意しないということでもとめられる。

中古語は、現代語に比べると、アスペクトとテンスの相関が強い言語と言える。そのため、中古語のアスペクト・テンスを研究するにあたっては、両者の相関に意識的であることが求められる。本稿では、主節とノチ節の考察を通して、こうした観点から研究を進めていくことの有効性の一端を示した。

注

¹ 中古語は京都方言(のうち、特に貴族の間で話されていたことば)、標準語は東京方言である。両者は同一言語/方言の時代的な変種ではないので、安易な比較は避けるべきである。ただし、アスペクトに関して言えば、標準語は現代京都方言と似たような体系を備えているので、中古語と標準語の比較は必ずしも外的外れではない。

² 基本形の先行研究としては、加藤(1985)、山口佳(1985)、鈴木泰(1986a; 1999²; 2001)、黒田(1992)などが挙げられる(ただし、上代語の研究も含む)。～キは実際のところ、

- (i) a. 現在と関わりを持たない過去(山口明 1982)
b. 完了した過去(山岸 1940, 鈴木泰 1986a; 1986b; 1987)
c. アオリスト(aorist)(橋本進 1930: 386-87, 山本 2000)

アオリスト: 印欧諸語の研究において用いられる用語。Dahl(1985: 81-84)やDahl & Velupillai(2005)によれば、過去を含意する完成相とされる。

などと呼ばれているが、本稿の立場に置き換えると、いずれも完成相ということである。

³ たとえば、現代語のアスペクト形式である「-ている」は、存在動詞や形容詞には接続しない。また、英語の「be V-ing」は、動態動詞を本動詞(先のVにあたる)とする場合、動作/変化の進行を表すが、be動詞(+形容詞)を本動詞にとると、動態動詞のときとは異なり、存在や状態の一時的性を表す。

- (i) a. When I entered the smoking room, my father smoked a cigarette.
b. When I entered the smoking room, my father was smoking a cigarette.
- (ii) a. John is kind for everyone (*today).
b. John is being kind for everyone today.

⁴ 欧州諸語の動詞は、陳述を担うときは定形、修飾を担うときは分詞形となる。英語では、動詞の分詞形が修飾を本分とする形容詞になるので、定形と分詞形では、後者の方がより有標的であることがわかる。

⁵ テキストは次のとおり。表記や句読点の位置は適宜改めた。

落窪物語：『日本古典文学全集』10, 小学館, 1972, 三谷栄一・稲賀敬二(校訂)

うつは物語：『新編日本古典文学全集』14-15, 小学館, 1999-2001, 中野幸一(校訂)

源氏物語：『新編日本古典文学全集』20-23, 小学館, 1994-96, 阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男(校訂)

⁶ ～ザリツという形はあるが、これに「-き」「-けり」「-む」などが後接することはないので(*～ザリテキ, *～ザリテケリ, *～ザリテム), このときの「-つ」は、アスペクトよりもむしろテンスに近いと考えられる。

⁷ 黒木(2006)では、基本形と～キ(下の引用では“キ形”)のアスペクト的な意味は、次のように異なると述べた。

基本形：アスペクチュアルな意味は動詞の語彙的な意味によるところが大きく、主体動作動詞は進行、主体変化動詞・達成動詞は結果状態/パーフェクトを表す。客体変化動詞は、過程の局面の焦点化が容易なものも進行、そうでないものは結果状態/パーフェクトを表す。

キ形：完成性も不完成性も有しているが、過去テンスという性格上、完成的な意味を表す例が圧倒的に多い。(黒木2006: 107)

⁸ ちなみに、中古語の「あと」は、時間的な意味ではなく空間的な意味を表す。「のち」と「あと」の通時的な意味の変化は、望月(1987)に詳しい。

⁹ 「-む」と「-けり」をテンスとして扱うことには異論があるかと思うので、ここでその理由を述べておく。まず前者について。「-む」は一般に、意志や推量(あるいは非現実性)を表すモード形式とされるが、未来を表す点に焦点を当てれば、テンス形式とも言える。その証拠として、次のことが挙げられる。中古語では、従属節時と参照節時が、発話時から見て過去/現在/未来で一致するとき、両者に同じテンス形式が現れるのであるが(注13参照), この現象は「-む」においても確認できる。このことから、「-む」はテンス形式としての面も持ちあわせていると考えられる。

続いて後者について。「-けり」は純粋なテンス形式ではないが、橋本修(1994)や井島(1996)によれば、ノチ節におけるふるまひは、「-き」と同じく考えて問題ないようである。したがって、「-けり」もテンス形式として扱う。

¹⁰ 従属節と参照節の時間的關係を表す文法的範疇(高橋1974, 寺村1984, Comrie 1985: 56-64, 工藤1995: 221ff, 岩崎2001などを参照)。なお、一般にテンスといえば、発話時を基準とする絶対的テンスのことを指す。

¹¹ 一般に、従属節と参照節の時間的關係を文法的に表現するときは、相対的テンスとアスペクトのどちらか一方のみが用いられるようである。このことを受けて、本稿では、両者が同時に用いられることはないという仮説のもとに論を進める。

¹² 『落窪物語』『うつほ物語』『源氏物語』のテキストは注5と同じ。他は全て『日本古典文学大系』(岩波書店)。表記や句読点の位置は適宜改めた。

¹³ 88例あるノチ節のデータのうち、53例が参照節と同じテンスになっている(表2参照)。また、かつて、同時的關係を表すトキ節を調査したところ(資料は3.3節に挙げたものと同じ)、400例を超えるデータが得られたが、その9割以上で参照節とのテンスの一致が見られた。

¹⁴ 中古語のノチ節は高い割合でアスペクトを標示するので(さらに言えば、過去テンスの標示が6割程度にとどまるので)、相対的テンスではなく、アスペクトによって参照節との關係を表すと考えられる。

引用文献

- 井島 正博(1996)「相対名詞または格助詞による時の副詞節」、『山口明穂教授還暦記念 国語学論集』,pp. 195-224, 明治書院
- 岩崎 卓(1999)「マエ節・アト節内のル形・タ形について」、『光華日本文学』7, pp. 15-29(左開き), 光華大学
- (2001)「複文における時制」、『月刊言語』30-13, pp. 12-17, 大修館書店
- 大野 晋(1968)「日本人の思考と述語形式」、『文学』36-2, pp. 25-36, 岩波書店
- 奥田 靖雄(1977)「アスペクトの研究をめぐって—金田一段階—」、『国語国文』8, 宮城教育大学[再録: 奥田靖雄(1984)『ことばの研究・序説』,pp. 85-104, むぎ書房]
- 加藤 康秀(1985)「古典語動詞の文末表現「～す」の用法」、『日本文学研究』24, pp. 92-97, 大東文化大学
- 工藤 真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』, ひつじ書房
- (1996)「否定のアスペクト・テンス体系とディスコース」, 言語学研究会(編)『ことばの科学』7, pp. 81-136, むぎ書房
- 黒木 邦彦(2006)「中古日本語における無標のアスペクト—テンスによるアスペクチュアルな意味の違い—」, 『日本語学会 2006 年度春季大会予稿集(於東京学芸大学)』, pp. 100-107, 日本語学会
- 黒田 徹(1992)「万葉集における動詞のテンス・アスペクト」, 『日本文学研究』31, pp. 139-50(左開き), 大東文化大学
- 小林 好日(1941)「上代における助動詞「つ」「ぬ」の本質」, 『国語学の諸問題』, pp. 242-343, 岩波書店
- 鈴木 重幸(1979)「現代日本語のテンス—終止的な述語につかわれた完成相の叙述法断定のばあい—」, 言語学研究会(編)『言語の研究』, pp. 5-59, むぎ書房
- 鈴木 泰(1986a)「テンス」, 『国文学 解釈と鑑賞』51-1, pp. 29-38, 至文堂
- (1986b)「古代日本語の過去形式の意味」, 『松村明教授古稀記念 国語学論集』, pp. 106-31, 明治書院
- (1987)「古文における六つの時の助動詞」, 山口明穂(編)『国文法講座 2 古典解釈と文法—活用語』, pp. 273-308, 明治書院
- (1999²)『改訂版 古代日本語動詞のテンス・アスペクト—源氏物語の分析—』, ひつじ書房

- (2001) 「時間的局在性とテンス・アスペクト—古代日本語の事例から—」, 『日本語文法』 1-1, pp. 24-40, 日本語文法学会
- (2004) 「テンス・アスペクトを文法史的にみる」, 北原保雄 (監修)・尾上圭介 (編) 『朝倉日本語講座 6 文法 II』, pp. 151-71, 朝倉書店
- (2005) 「古代日本語の時間表現」, 京都府立大学 2005 年度集中講義資料, 未公刊
- 高橋 太郎 (1974) 「連体形のもつ統語論的な機能と形態論的な性格の関係」, 『教育国語』 39, むぎ書房 [再録: 松本泰丈 (編) 『日本語研究の方法』, pp. 233-58, むぎ書房, 1978]
- (1985) 『現代日本語のアスペクトとテンス』, 『国立国語研究所報告』 82, 秀英出版
- 寺村 秀夫 (1971) 「‘タ’ の意味と機能—アスペクト・テンス・ムードの構文的な位置づけ—」, 『言語学と日本語問題』, くろしお出版 [再録: 梅原恭則 (編) 『論集日本語研究 7 助動詞』, pp. 256-88, 有精堂出版, 1979]
- (1984) 「従属節のテンス, アスペクト」, 『日本語のシンタクスと意味 II』, pp. 184-216, くろしお出版
- 橋本 修 (1994) 「上代・中古和文資料における, ノチ節のテンスとアスペクト」, 『文芸言語研究』 言語編 26, pp. 55-72, 筑波大学文芸・言語学系
- 橋本 進吉 (1930) 「完了および過去の助動詞」, 『助詞・助動詞の研究』, pp. 347-87, 岩波書店, 1969
- 望月 満子 (1987) 「ノチとアトの語義について—その史の変遷」, 『国語学』 148, pp. 1-15, 国語学会
- 八亀 裕美 (2001) 「現代日本語の形容詞述語文」, 『阪大日本語研究別冊』 1, pp. 1-144, 大阪大学
- (2004) 「述語になる品詞の連続性—動詞・形容詞・名詞—」, 工藤真由美 (編) 『日本語のアスペクト・テンス・ムード体系—標準語研究を超えて—』, pp. 78-119, ひつじ書房
- 山岸 徳平 (1940) 「古典の論理的解釈と日本文法学の再吟味」, 『皇朝文学』, 白帝社 [再録: 『歴史戦記物語研究』 (山岸徳平著作集 4), pp. 420-54, 有精堂出版, 1973]
- 山口 明穂 (1982) 「源氏物語の語法」, 『武蔵野文学』 30, pp. 17-21, 武蔵野書院
- 山口 佳紀 (1985) 「時制表現形式の成立〈上〉—叙法との関わりにおいて—」, 『古代日本語文法の成立の研究』, pp. 483-98, 有精堂出版
- 山本 博子 (2000) 「中古語におけるキ形とニキ形・テキ形の違い」, 『国文』 93, pp. 42-51, お茶の水女子大学
- Bybee, Joan L. (1994). The grammaticization of zero. In Pagliuca. (ed.). (1994). *Perspectives on grammaticalization*. pp. 235-54. Amsterdam: John Benjamins.
- Bybee, Joan L., Revere Perkins, and William Pagliuca. (1994). *The evolution of grammar: Tense, aspect, and modality in the language of the world*. Chicago: University of Chicago Press.
- Comrie, Bernard. (1976). *Aspect*. Cambridge: Cambridge UP.
- . (1985). *Tense*. Cambridge: Cambridge UP.
- Dahl, Östen. (1985). *Tense and aspect systems*. Oxford: Basil Blackwell.
- Dahl, Östen and Viveka Velupillai. (2005). 65-68 Tense and aspect. In Haspelmath, Dryer, Gil, and Comrie. (ed.). *The world atlas of language structures*. pp. 266-71. Oxford: Oxford UP.